

大学生のためのライティング基礎

千葉大学 人文社会科学研究所
教育・学修支援研究会

大学生のための ライティング基礎

千葉大学 人文社会科学研究科
教育・学修支援研究会

目次

前書き

第1章 大学で学ぶ難しさ	3
大学で会う4つの困難	
学習、学力とはそもそも何か	
学びの根本問題とコミュニケーション	
学びを阻害するもの	
第2章 わかりやすい文章を書く	8
わかりやすさを求めるということ	
わかりやすい文の書き方	
論点をとらえる：「問い」と「答え」の対応	
論点は対話？	
「問い」に「答え」を出す際に必要なこと	
第3章 感想を書こう	20
コメントカード…ってどうしたらいいの？	
「感想」とは自分との「関連付け」	
これからの「感想文」	
「感想文」を書くために… メモを取りましょう！	
なぜコメントカードを書くの？	
第4章 感想からレポート、論文へ	24
感想文とレポート・論文の違い	
レポート・論文を書くには	
引用と参考文献の書き方	
参考文献リストの作り方	
引用と文中での参考文献	
【付録1】メモ例	34
【付録2】レトリックとは何か	35
参考文献	

前書き

本書は、大学生のためのライティングの基礎を言語コミュニケーション論や古典的レトリックの観点から1クォーターの授業用に簡略にまとめたものです。言語コミュニケーション論や古典的レトリックがどのようなものかは本文中で説明します。それよりまず執筆者一同の願いは、大学に入る前から「感想文」や「小論文」の訓練を積んできた大学生の皆さんが、その上に立って、大学で求められる「コメントカード」や「レポート」や「論文」にどう取り組むべきか、その基本的な考え方を身に付けてもらいたいということです。こうして身に付けたライティングの基礎は、就活や職業生活でも必ず役に立つと思います。

大学での教育研究や社会人のビジネスにおいて、ライティングやプレゼンテーションという《情報を発信するための言葉のスキル》の重要性に関心が高まり、多くの教科書が出版されています。その中には似たようなアドバイスが少しずつ違う表現で書かれていて、どれに従えば良いのか迷うこともあるかも知れません。本書で基本的な考え方を身に付ければ、それら上級の教科書のアドバイスもよりよく理解できるようになると思います。

大学生からのライティングが高校までの作文課題と異なるのは、次の基本姿勢です。

1. 当事者性：
自ら積極的にそのコミュニケーションの場に入り込み、コミュニケーションの場の形成の当事者になる。
2. 自己主張：
テーマに関心を持ち、自らの問題として考え、自らの主張を持つ。
3. 説得と合意：
自らの主張で他の人を説得し、賛同を求める。異なる意見があれば妥協や修正による合意を求める。

せいぜい教員や採点者を相手として意識するくらいで、目の前の文章を孤独に黙々と仕上げていくようにしか思えないライティングにおいて、このような3つの基本姿勢を実感することは中々難しいと思います。けれどもこれから大学での研究活動や実社会の職業生活で書く文章は、関係する多くの人々に読んでもらい、評価や意見をもらい、説得し、合意を作り、仕事をより良く進めるために、必要があって書くものです。《情報を発信するための言葉のスキル》としてライティングとならぶプレゼンテーションで考えてみれば、この基本姿勢の重要性がよりいっそうわかるでしょう。

本書が皆さんに伝えたいことは、この3点の基本姿勢の重要性に尽きます。

学問が長足の進歩を遂げる一方、変化の著しい現代社会で活躍するために一層高度な知識が要求されるようになりました。新しい社会的課題に対応できる能力を育成するために、学際性や実践性が改めて大学における教育に求められます。その中で大学における教育・学修支援の必要性が議論され、制度の整備が進められています。このような調査と改善をIR (Institutional Research) と言いますが、本書はその成果の一つとして、「平成27年度千葉大学教育GP」の予算を得て行った教育研究活動を元にまとめられたものです。

大学における教育・学修支援は多岐にわたりますが、人文社会科学研究科として最も貢献できる分野として、《情報を発信するための言葉のスキル》であるライティングやプレゼンテーションの教育改善に注目し、関連する授業の分析やディスカッションを積み重ねて本書をまとめました。

執筆者一同この成果に甘んじることなく、更に研究活動を続けるつもりですので、皆さんのご意見ご批判をお寄せ下さいますよう、お願いいたします。

2016年2月28日

千葉大学大学院人文社会科学研究科 教育・学修支援研究会 世話役
千葉大学大学院人文社会科学研究科 研究科長

石井 正人

第1章 大学で学ぶ難しさ

大学で出会う4つの困難

高校から大学にあがり、学生がまず直面する困難として以下の4つの事柄が挙げられるでしょう。

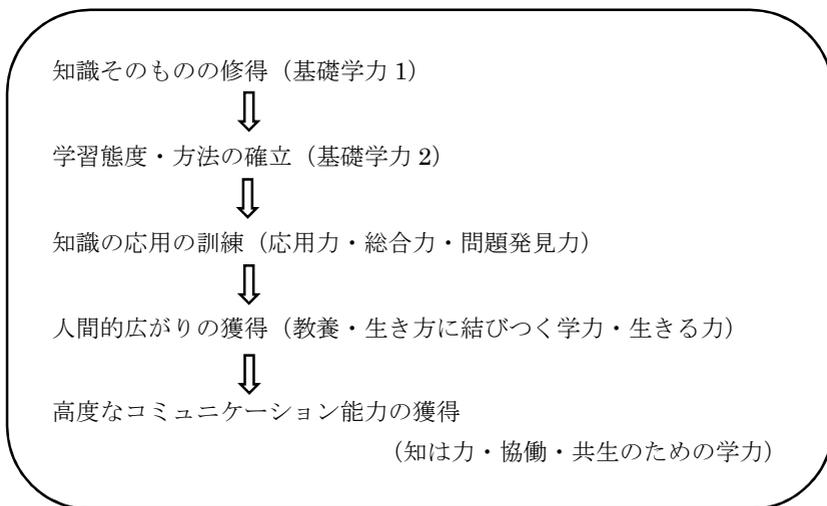
1. 高校までの学習と大学での学習が違う
2. 講義内容が急に難しくなる（専門用語と専門的議論）
3. 学習目的を立て直す
4. 相談相手を見つける

高校までの学習は、授業で先生が教科書にしたがって話したり板書したりする内容を、ノートに書き写し、それを元に復習するなどしてテストである程度の点数をとるだけで良かったと思います。大学ではそうもいかず、自ら問題提起をすることを求められたり、専門的な授業に理解が追いつかなかったりする場合も多いのではないのでしょうか。そのような状況の中で、学習する意味を見失い、途方に暮れてしまう学生もいるでしょう。

学習、学力とはそもそも何か

学習とはその場限りで終わるものではありません。知識そのものの修得のみではなく、学習態度、方法の確立も目的のひとつです。得た知識を応用し、様々なテーマと関連付けて考える力も身につけていく必要があります。そうすることによって、人間関係で必要な教養、生きる力の獲得にも繋がりが、さらに高度なコミュニケーション能力へと発展させていくことも可能です。

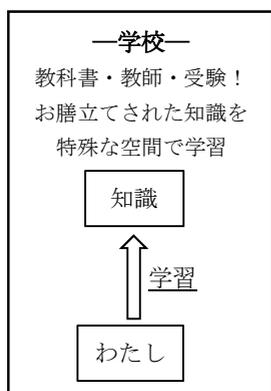
学力の発達には次の図のような流れになります。



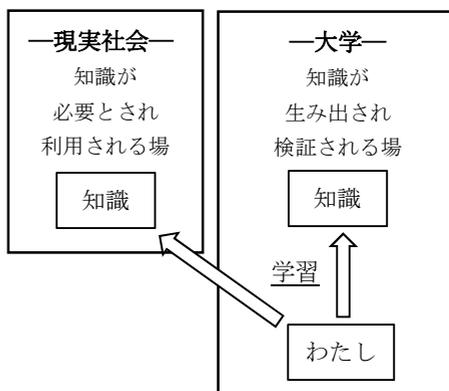
高校までは、「知識」がなぜ必要か、「知識」をどう利用するのか、何が正解か、ということは改めて考えることが少なく、学校という枠組みや教員の指導、入試や成績という目的から必要な「知識」ががちり既製品として与えられていました。

大学からは知識を利用したり生み出したりする現場・最前線で学んでいくことになります。

<高校までの学習>



<大学からの学習>



知識・学習とは、自分に様々な力をつけ、自分を色々な意味で豊かにするという「一人のため」のものであるだけでなく、知識・学習を通じて「他の人」とより深く、強く、高い意味で結びついて行くためのものです。「他の人」と共有できたとき、自分の「学力」も一層高まるのです。

学びの根本問題とコミュニケーション

学習というのは本来、人と知識・情報をやりとりするコミュニケーションの一分野です。人と正しく納得のいくコミュニケーションを実現する能力があるかどうか、学習においても鍛えられることになります。

学びにおいて基本となるのは、「何を（対象）、どうやって（方法）、何のために（目的・主体性）」学ぶのかということです。これをはっきりさせて取り組まないと、力にはなりません。目的は一般的なものでも、自分にとって意味があるだけでもかまいません。きちんとした目的意識を持つことが大切なのです。

学びの根本にあるのは情報の取り扱い、つまりコミュニケーションの問題です。上述したように学習がコミュニケーション能力の獲得につながるというのは、まさにこのことなのです。

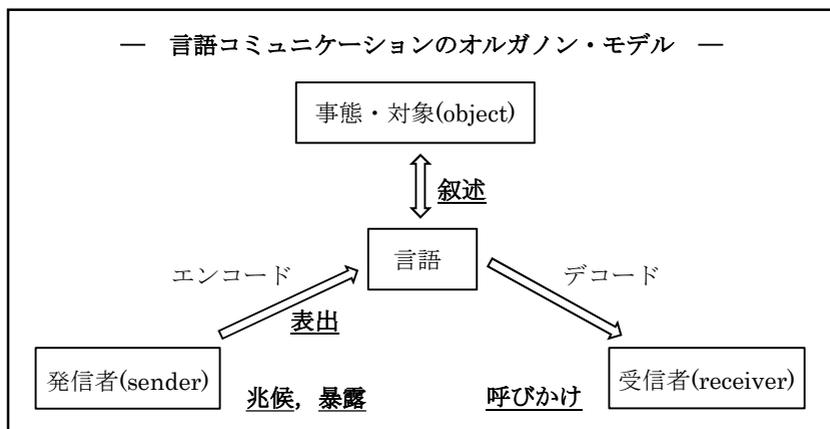
学びにおいては、情報を以下の4つのように取り扱うことになります。

1. 情報（学習内容・知識）を正しく受け取る
2. 情報（学習内容・知識）を利用・応用する
3. 情報（学習内容・知識）を発信・共有する
4. 情報（学習内容・知識）を進化発展させる

そもそも、コミュニケーションはどのように成り立っているのでしょうか。情報の送り手（発信者）が情報を言語に置き換え（エンコード）、情報の受け手（受信者）に送ると、受信者が言語から情報を解読する（デコード）。これが情報伝達の基本の流れです。けれどもコミュニケーションはそれだけでは成り立ちません。

発信者が自分の言いたいことを正確に表現できたか（表出）、発信者が情報内容を正確に言い表したか（叙述）の他に、相手から望み通りの反応を引き出せたか（呼びかけ）

ということがないと結局コミュニケーションが成功したことになりません。そのほか、常識的な話の流れに沿って発信され、違和感がなかったか（兆候）とか、情報以外の発信者の状態が自然とにじみ出て信頼感を与えたか（暴露）といった諸点が満たされなければなりません。



コミュニケーションには、「情報内容の伝達」という機能（表現・認識機能）のほかに、「コミュニケーションの場を作り出す」「共同体の結束を強める」という機能（規範機能）があります。

人間の言葉は「共同体の結束を強める」という規範機能の方が根元的で、もともとはサルが仲間意識を高めるために行うグルーミング（のみを取り合う）やマウンティング（乗っかりあう）から発生したといわれています。

言語コミュニケーションの機能をまとめると次のようになります。

- a) 表現・認識機能 = 言葉の意味内容の伝達
- b) 規範機能 = 言語集団の結束強化
(敵か味方を判定する機能)

学びを阻害するもの

言語コミュニケーションの本来の機能は、言語共同体の結束強化・維持を目的としています。自分が属している（と信じる）共同体を守ることは「価値観・倫理観」の基礎になりますから、言語コミュニケーションはその都度自分の価値観を検証する行為でもあります。

学びを阻害する要因には少なくとも次の3つが挙げられます。

1. 共同体の変容
2. 経済的危機
3. 知の変容

自分を守ってくれ、また自分が守るべき共同体が見えなくなったり、失われたりすると、価値観や倫理観も混乱し、コミュニケーションが危機に陥ることになります。こうなると「正しい言葉とは何か」という、言語規範が動揺します。「正しい言葉」というのは押しつけがましく、嫌な響きがありますが、誰でも安心して使える言葉、という安定した相互理解のツールでもあるのです。

このような言語規範が失われると、社会的にコミュニケーションが機能不全を起こします。コミュニケーション能力が衰退すると、「直ぐに手が出る」と俗に言うように、暴力が蔓延するようになります。

言葉で高度な情報をやりとりすることを積み重ねるのが基本ですから、コミュニケーション能力が衰退すると、学習の目的も意味も失われることになります。

たとえば、経済危機から雇用が不安定になると、従来通りの学習を積んで知識・学力・コミュニケーション能力を高めても社会的・経済的に報われず、結果として学習の意義を見失い、学習意欲が減衰してしまいます。学習とコミュニケーションは、深く社会の問題とつながっているのです。

コラム：大学という特別な形の学校（1）

上級の学校は歴史上世界中にありましたが、「大学」という特別な形は12世紀頃の西ヨーロッパで成立しました。

第2章 わかりやすい文章を書く

わかりやすさを求めるということ

わかりやすいということは、情報の正確な受け渡しが可能であるということです。自分の意図を人に理解してもらい、さらにその人と信頼関係を築いて共同作業を進められるようにするために、これは必要なことです。日常の会話やメールのやりとりなどでも、自分の言いたかったことがうまく伝わらなかったり、逆に相手の言葉を誤解してしまったりすることは誰にでもあります。そのような時にどうして伝わらなかったのか、どうして誤解してしまったのかを少し立ち止まって考えてみるのが、同じ失敗を避けることに繋がるのです。わかりやすさがコミュニケーションにおいてとても重要であることがわかりますね。

また、これは学びにおいても同じことです。授業は教授と学生の間で情報の受け渡しが行われる場です。教授は自分の知識を学生に伝え、学生はその知識が正確に伝わったことをコメントカードやレポート課題で表明します。また、一見一方的な主張に思われる論文も、情報を伝える側（＝書き手）と情報を受け取る側（＝読み手）のコミュニケーションの成立が前提にあります。これがうまくいかなければ、どんなに素晴らしい内容が書かれていたとしても正確に伝わらないので意味がありません。見えない相手を念頭におき、いかにわかりやすい文章を書くかが大切です。

わかりやすい文の書き方

わかりやすい文章を書くためには、そもそも文章を構成する文自体がわかりやすくなくてはなりません。自分の中でどんなに明確な主張があっても、文の構造のちょっとした違いによって、読み手に大きな誤解を与えてしまうこともあります。伝えたい事を正確に伝えるため、曖昧な表現は避けるよう心掛けましょう。

よく見られるわかりにくい文の例を挙げました。みなさんもこのような、いわゆる「悪文」を日常的に見ることがあるのではないのでしょうか。どうしてわかりにくいのか、どうすればわかりやすくなるのかを考えてみてください。

【問】

- 1) 何度もメロンパンは美味しいから食べたい。
- 2) 2つの事件を扱った記事
- 3) 今夜のパーティーでは私が歌い、母がセールで買ったケーキを食べる。
- 4) 来週友人と会う予定で、彼とは小学生の時に出会い、家も近所でかれこれ20年来の仲なのだが、今から楽しみだ。
- 5) 東京は暖かいので、雪がめったに降らないので、大雪になった先週の東京では交通機関が混乱した。

【解説】

1) 修飾語句と被修飾語句の対応が曖昧

これは、修飾語「何度も」と被修飾語「食べたい」の位置が離れているため、対応が曖昧になってしまっている例です。より長い文になると一層わかりづらくなってしまいます。例えば「何度もメロンパンは甘くてサクサクしていてメロンの味はしないけど美味しいから食べたい」とするとどうでしょうか。もう何が言いたいのかわからなくなってしまいますよね。この例の場合は「メロンパンは美味しいから何度も食べたい。」と書いた方がずっとわかりやすくなります。

2) 修飾語句と被修飾語句の対応が曖昧

これも修飾語句と被修飾語句の対応が曖昧な例ですが、(1)と少し違うのは「2つの」という修飾語句が「事件」と「記事」どちらにもかかり得るという点です。これでは2つの事件を扱った1つの記事なのか、1つの事件を扱った2つの記事なのか曖昧です。事件が2つなのだとしたら「2つの事件を扱ったこの記事」など、記事を特定するとはっきりします。また、記事が2つなのだとしたら「事件を扱った2つの記事」とするとわかりやすくなります。

3) 主語と述語の対応が曖昧

この例では、ケーキを食べるのが私なのか母なのかはっきりしません。私が食べるのなら「今夜のパーティーでは私が歌い、セールで母が買ったケーキを食べる。」、母が食べるのなら「今夜のパーティーでは私が歌い、セールで買ったケーキを母が食べる。」などに変えると意味が伝わりやすくなります。ちょっとした語順の違いで、伝わる事柄も変わってくるのです。

4) 挿入部が長すぎる

途中に入っている友人の説明が長すぎて、本題が見えにくくなってしまっています。この例で一番伝えたいのは「会うのが楽しみだ」ということです。それがはっきりと伝わるように、長すぎる説明は別の文に分けましょう。「来週友人と会う予定なので今から楽しみだ。彼とは小学生の時に出会い、20年来の仲である。」とすると、本題も説明も伝わりやすくなります。

5) 原因、理由、譲歩などが1文に複数ある

この例では理由を示す「ので」が1文の中に連続で2回使われているため、しつこい印象を受けます。同じ成分の語句を何度も使わなければならない場合は文を分け、表現を変えるとすっきりします。「東京は暖かいので雪がめったに降らない。そのため、大雪になった先週の東京では交通機関が混乱した。」とすると、それぞれの文が簡潔になり、わかりやすくなります。

以上の例から、自分勝手に文を書くとき文法的には正しくても読みにくい文になってしまうことがわかります。思考の流れと同時につらつらと書こうとするとこのような事態に陥りがちです。一度頭の中で文を組み立て、整理してから書くようにしましょう。ここでも大切なのは、やはり読み手を意識することです。誤解を与える可能性がないだろうか、述べたいことがきちんと伝わる文になっているだろうか、書いた後は客観的に読み直しましょう。そして、わかりにくい表現はどうしたらわかりやすくなるか考えて改善しなければなりません。

1. 読み手を意識する。
2. 頭の中で文を組み立てる。
3. 読み直す。
4. わかりにくい表現は改善する。

文の単位でわかりやすさを意識してから、やっと文章全体のわかりやすさにも目を向けることができます。わかりやすい文章を書くために重要となるのは、「論点」をとらえることです。「論点」とはつまりどういうものなのか、次の節で説明します。

論点をとらえる：「問い」と「答え」の対応

誰かと話をしているときや、誰かの話を聞いているとき、その人の言っている日本語はもちろん聞き取れるけれど、結局その人が何を言いたいかわからない、と思ったことはありませんか。わからないまま最後に「何か質問はある？」と聞かれても、「何がわからないかわからない」というのが本音ではないでしょうか。これはその人の話の論点を自分が理解できていないことを示します。その原因には、自分の理解力だけでなく、その人の話し方にも問題があるのかもしれません。

話には内容があり、しばしば「問い」とそれに対する「答え」とでその内容は成り立っています。あなたが誰かと話している場面を考えてみましょう。話し相手があなたに尋ねます。「昨日どこにいたの？」「郵便局はどこでしょうか？」。こうした問いかけに、「今日は寝坊した」や「文房具屋は今日お休みです」は、「問い」と「答え」が噛み合わないで、答えになっていません。相手がどのような情報を欲しているのかをとらえ、適切な答えを提供することが求められます。

会話だけでなく、文章表現においても同じことが言えます。今読んでいる、または書いている文章が何を言うためのものなのかは常に意識する必要があります。ある文章が何について述べているものなのか、つまり「その文章のテーマ（主題）は何なのか」を意識することで、その文章を理解しやすくなります。また自分で文章を書く場合も、こうしたテーマを意識することで、読み手にわかりやすい文章になります。

【問】 次の文章に一言で題名をつけてみましょう。

国内でも国外でも、出張でよその街に行くことが多い。その場合、私はできるだけ自由行動の日を作り、地元交通機関を利用してその街を回るようにしている。各地には多かれ少なかれいわゆる観光名所がある。見事な庭園の中を歩いたり、博物館で壮大な展示を見たりすることも確かによい。しかしその街にあるものは、それだけではない。こうした土地勘のない場所ですらその街を網羅しているバスや路面電車に乗る。あてもなく街中をさまよっていると、ガイドブックには載っていない、なかなか味のある場所に行き着くこともある。どこに連れて行かれるかわからない不安と、自分の故郷とは違った風景に出会える新鮮さは、その街でしか味わうことができない。こうして私は、必ずしも名所めぐりだけではない観光を各地で楽しんでいる。

【解説】

題名は「私の観光」です。この文章は、有名な場所のみを訪ねる通常の「観光」と、「私」の個人的な街めぐりを比べています。そして後者について、「私は、必ずしも名所めぐりだけではない観光を各地で楽しんでいる」と最後にまとめています。

話の「論点」をはっきりさせ、整理し、かみ合わせないと、コミュニケーションは成り立ちません。新聞の記事を読むことは、論点を的確にとらえるよい訓練になります。

【問】見出しのない新聞記事などの文章の一つ読み、その文章の論点を述べる語句または一文を書き出してみましょう。

【問】新聞の記事を使って、要約の練習をしてみましょう。

- 1) 通常の記事や社説など、要約のある長い記事の一つ選びます。
- 2) 要約を読まず、自分の言葉で記事の論点を取り出して文章でまとめてみましょう。
- 3) 自分の文章とその記事の要約を比べると、どのような違いがあるでしょうか。

論点是对話？

「対話」は言葉と言葉とのやりとりであり、そこには「問い」と「答え」の関係があります。「問い」と「答え」とは、必ずしもあなたと誰かとの言葉の「やりとり」や「会話」とは限りません。独り言も、「対話」の一つです。「問い」と「答え」のセットを自覚し、整理し、明確にしたものが「論点」となります。

1. どんな「問い」への「答え」のつもりか？
2. どんな新しい「問い」のつもりか？

これらを意識しながら論点は進んでいくことになります。次の文章を考えてみましょう。
 < >内のような課題について、ある人が自分の考えを文章にしました。

<あなたは現在の自分の生活習慣について、どのように考えていますか。簡潔に述べてください。>

私はいわゆる「夜型人間」である。しかしこれからは生活を朝型に変えようと思っている。朝早く起きると、一日が長く感じられる。6時頃に起きて7時に朝食をとるまでの間、好きな本を読むこともできるし、大学の課題レポートを書くこともできる。午後になると面倒になりがちなることを一日の最初に少しでも片づけてしまうと、それだけで一日が充実したような気分になれる。何より、一日の活動を本格的に始める前に、既に一つのことが終わっているということが快感である。夜中は確かに喧騒もなく、自分のことに集中できるのはよい。しかし、夜遅く寝て午前11時くらいに起きると、午前中の時間を浪費したような気分になる。毎日、何とか早目に就寝するようにしたい。

朝型生活の利点を述べた文章ですが、筆者は自分で立てた「問い」に自分で「答え」を出し、またそれに基づいた新しい「問い」に新しい「答え」を出すようにして文章を書き進めています。筆者の頭の中で、次のような「問い」と「答え」のやりとりが行われていると考えてください。

コラム：大学という特別な形の学校（2）

「大学」というのは元々ラテン語の *universitas* 「組合・結社」のことで、教員の「組合」や学生の「組合」が自主的に授業を計画し、会場を借りて実施したのが始まりです。知識を生み出し、検証するという「研究」と、その知識を「教育」ということが、最初から不可分のものとされてきました。教員と学生が全く対等の立場で自由に丁々発止とやり合う中で「研究」と「教育」を進める、この新しい「大学」という学校の形は大成功で、非常に生産的でした。これが大学の特徴であり、世界中に広まった理由です。このような「大学」の特徴に王侯貴族が注目し、庇護を与え、利用しようとしてきました。近代入ってから、新興国であるドイツや日本で国家そのものが大学経営に乗り出します。

問い	答え
自分の生活習慣はどうか？	— 私はいわゆる「夜型人間」である。しかしこれからは生活を朝型に変えようと思っている。
なぜか？	— 朝早く起きると、一日が長く感じられる。
何時頃か？何ができるのか？	— 6時頃に起きて7時に朝食をとるまでの間、好きな本を読むこともできるし、大学の課題レポートを書くこともできる。
それはどんな気分になるのか？	— 午後になると面倒になりがちなことを一日の最初に少しでも片づけてしまうと、それだけで一日が充実したような気分になれる。何より、一日の活動を本格的に始める前に、既に一つのことが終わっているということが快感である。
夜中も時間が十分にあるが、夜型ではだめなのか？	— 夜中は確かに喧騒もなく、自分のことに集中できるのはよい。
ではなぜ夜型はだめか？	— しかし、夜遅く寝て午前11時くらいに起きると、午前中の時間を浪費したような気分になる。
だから？	— 毎日、何とか早目に就寝するようにしたい。

こうした「問い」と「答え」の連鎖を意識することで、それぞれの文と文のつながりも意識することになります。

「問い」に「答え」を出す際に必要なこと

大学生にとって身近な「問い」と「答え」と言えば、授業で出されるコメントカードの記入方法や、試験での答案の書き方なのではないでしょうか。こうしたものを書くときも、どういうことが出題されていて、どう答えるべきなのかを意識します。この際に重要な点は、次のことです。

1. 「問い」を自分に都合よく歪曲することなく、正しく把握します。
2. 「問われていること」だけに答えるようにします。答えはただ長ければよいという考えは捨てましょう。
3. 前提として存在する・想定されている知識は何か考えましょう。
4. 「答え」になる文と文との間の筋道を明確にします。

こういった点を実践していくために、次の【問】を参考にして自分に必要な対策を考えてみましょう。

【問】 次の文章を読み、4人の学生が自分の考えを述べました。ところがそれぞれの書き方はどこか不自然です。どうして不自然なのか、またどのように改善したらよいでしょうか？

コンピューターなくして現代の生活は考えられない。それまで手作業や紙媒体で行われていた煩雑な作業の多くはコンピューターが担うようになっていく。旧来そろばんや電卓を用いていた家計簿の管理はソフトウェアの普及により簡略化された。書籍は冊子体で販売され、書店に在庫のないものは取り寄せてもらうことが常であったが、近年インターネットの普及により書店に出向かずとも購入、さらに閲覧することも多くの場合可能になっている。しかし、コンピューターは旧来の手段を完全に置き換えることができるだろうか。

Aさん

「コンピューターは、すぐにではないかもしれないが、様々な面で既存の手段を置き換えることができるだろう。私はインターネットに恩恵を受けている。中学生の頃からパソコンに興味を持ち、インターネットを使う授業が好きだった。高校に入ってから勉強や友達とのメールなどでパソコンを使う回数が増えた。これから大学でレポートを書くためにインターネットを使うし、教授との連絡を取るうえで、Eメールを使わないことは考えられないだろう。」

Bさん

「コンピューターの普及は旧来の手段を部分的には置き換えることができるが、完全ではない。問題にあるように、これまでは煩雑な操作がいろいろなところで必要であった。ストレスを軽減することは人間にとって重要である。しかし、書籍を読む場合は、紙媒体の形が適している。従って、コンピューターは万能とは言えない。」

Cさん

「コンピューターは旧来の手段を置き換えることはできない。我々の生活では、インターネットが安くなり、家庭でも容易に使用できるようになった。私は高校生の頃からインターネットを利用し、充実した生活を送っている。しかし、もしも故障した場合、レポートやメールなど、それに頼っていたものが使用できなくなるという問題が生じる。こうしたトラブルは従来の手書きや手紙で行っていた作業では起こらなかったものである。これらはごく身近なものではあるが、こうした問題を解決できない限り、インターネットが万能であると実感することはできない。」

Dさん

「コンピューターは便利ではある。1990年代からコンピューターの形態は多様化し、企業ではもちろん、個人の家庭でも不可欠である。問題にあるように、これまでは煩雑な操作が手作業では必要であった。電卓を用いて家計簿をつけるには検算をしなければならず、ここで間違いがあるともう一度計算をし直すことになる。家計簿は自分の出費を数字で表すことができるので、一人暮らしをしている学生には大切である。しかし電子機器で本を読むと、ページを読みづらく感じることもある。高校生の頃は小説を読むのが好きで、読書感想文を書くのが得意であった。大学では、できるだけたくさんのジャンルの本を読んでみたい。こうして得た知識は就職活動にも役立つものと思う。このため、本を読むにはコンピューターが便利とは思えない。」

【解説】

Aさんの書き方

答えている間にだんだん論旨がずれてきて、結局問いに答えておらず、読み手に書き手の意図が伝わらなくなっています。Aさんの文章は「コンピューターは私にとって不可欠である」という主張にはなりますが、コンピューターが既存の手段を置き換えられるかどうかという問いにはほとんど触れていません。

そこで、問いに対する答えになるように、論理の飛躍を避けます。個人的な体験も論旨の一つとして使うことはできますが、あまり多くならないようにします。

「コンピューターは、すぐにはないかもしれないが、様々な面で既存の手段を置き換えることができるだろう。私自身が中学生・高校生の頃より、勉強や友人とのコミュニケーションにインターネットを頻繁に利用し、その有用性を理解している。それはこれから大学で勉強をするうえでも変わらないことだろう。こうした個人的な体験の他、問題にある家計簿ソフトウェアの普及が複雑な作業を解消したこともコンピューターの普及の恩恵と言える。書籍については、紙媒体の方が読みやすいという意見もあるものの、本が増えすぎて保管場所に困るという物理的な問題も生じてくる。これらの要因から、数十年先かもしれないが、将来的にコンピューターは旧来の手段を置き換えていくだろう。」

Bさんの書き方

「コンピューターは完全ではない」という自分の論理はありますが、それが言葉足らずであるために部分的にしか伝わっていません。読者は論理が飛躍している印象を受け、答えへの筋道が読み取りづらくなっています。このため、例えば次の(1)から(3)のような、つながりになる文が必要になります。

「コンピューターの普及は旧来の手段を部分的には置き換えることができるが、完全ではない。問題にあるように、これまでは煩雑な操作がいろいろなところで必要であった。(1) 煩雑な操作から来るエラー、またそれを修正するための作業はそれを行う人間にストレスを強いることになる。ストレスを軽減することは人間にとって重要である。(2) このため家計簿をつけるような単純な作業には、コンピューターの使用は好都合と言える。しかし、書籍を読む場合は、紙媒体の形が適している。(3) 本を電子版で読むと画面を凝視することで目の疲労を招く。また冊子体では今読んでいるページと前のそれとを読み比べることができるが、画面をスクロールしなければならない電子機器ではそれが困難である。従って、コンピューターは万能とは言えない。」

C さんの書き方

自分の論理はあるものの、それが不適切な言葉遣い（曖昧な言語使用・意味の誤解）のために正確に伝わっていません。書き手と読み手との間に誤解を生じやすくなります。まず、インターネットという「通信設備」と、コンピューターという「装置」とが明確に区別されていません。「インターネットが安くなり、家庭でも容易に使用できるようになった」とありますが、これはインターネットの利用料が安価になったのか、インターネットにアクセスできるコンピューターが安価になったのかがわかりません。「故障した」の主語がありませんが、「コンピューター」のことを言っていると思われます。また最後に「インターネットが万能であると実感することはできない」とあることから、おそらく「コンピューター」のつもりで「インターネット」と書いています。

こうした書き方を改善するには、使い方が混同されている「インターネット」と「コンピューター」の区別を明確にします。

「コンピューターは旧来の手段を置き換えることはできない。我々の生活では、インターネットが普及し、コンピューターが昔よりも安価になり、家庭でも容易にコンピューターを用いてインターネットを使用できるようになった。私自身、高校生の頃からインターネットを利用し、充実した生活を送っている。しかし、もしもコンピューターが故障した場合、レポートやメールなど、それに頼っていたものが使用できなくなるという問題が生じる。こうしたトラブルは従来の手書きや手紙で行っていた作業では起こらなかったものである。これらはごく身近なものではあるが、こうした問題を解決できない限り、コンピューターが万能であると実感することはできない。」

D さんの書き方

一つの文章中に、問いの答えとして無関係ではなくとも本質的でない下のような情報がつまっています。

- (1) コンピューターが 1990 年代から多様化してきた。
- (2) 家計簿が一人暮らしをしている学生には大切である。
- (3) 高校生の頃は読書感想文を書くことが得意で、大学でたくさんのジャンルの本を読み、就職活動にも役立てたい。

(1)から(3)についてそれぞれ述べられた後で論述が主題に関する部分に突然戻るため、論旨が見えにくくなっています。また、最初の「コンピューターは便利ではある」は家計簿を手軽につけられることには該当しますが、最後の「本を読むにはコンピューターが

便利とは思えない」という箇所は冒頭の文とは別のことを言っています。このため、コンピューターが旧来の手段を置き換えられるかどうか、という問いについて賛成か、反対かのどちらの立場を取っているのか、あるいは「どちらとも言えない」と主張したいのかがわかりづらくなっています。

したがって、不要な箇所を省き、冒頭に「コンピューターは必ずしも万能ではない」という趣旨の説明を補います。また「たしかに」と「しかし」といった、呼応する語を補うと、論旨を運びやすくなります。(3)の読書の大切さを個人的な体験からどうしても挙げたい場合、文章の主旨に合うよう、表現を変えて入れることもできます。

「コンピューターは既存の作業を置き換えていくものと一概に言うことはできない。コンピューターはたしかに便利ではある。問題にあるように、これまでは煩雑な操作が手作業では必要であった。電卓を用いて家計簿をつけるには検算をしなければならず、ここで間違いがあるともう一度計算をし直すことになる。しかし電子機器で本を読むと、ページを読みづらく感じることもある。私は高校生の頃、小説を読むことが好きで、読書の大切さを理解している。大学では他にも様々なジャンルの本を読んでみたいと考えているため、負荷を感じない読書方法を考えることも重要である。このため、本を読むにはコンピューターが便利とは思えない。」

皆さんの書き方はいかがでしょうか。まずは自分の傾向を理解し、理想的な答え方をするにはどのようなことに気を付けたらよいか考えましょう。

コラム：学問を伝える言葉 (1)

言語コミュニケーションで使われる言葉には「制限コード」と「精密コード」の2種類があります。目的や場合により、様々な濃度で併用し、使い分けています。「制限コード」というのは、生活の場に密着した、親しい人間の間で使う種類の言葉です。「制限コード」と呼ぶのは、特定の個人や具体的な場面での使用に「制限」されていて、抽象的・普遍的な話に向かないからです。

第3章 感想を書こう

「コメントカードを書きなさい」「あなたの感想を聞かせてください」「これについてどう思いましたか？」…今までも、そしてこれからも、さまざまな場面で「感想」を求められます。ここでは感想の書き方の例として、コメントカードにどんなことを、どんなふうにかきたいらいいか学びましょう。

コメントカード…ってどうしたらいいの？

コメントカードとは、学生が授業内容をどの程度理解できたか、どの部分に興味があるのか、あるいはどこがわかりにくかったのか、…といったことを教員が知るためのツールです。単に出席を取るために使用されることもありますが、基本的には授業に対する学生の「感想」を求めています。

コメントカードに書く「感想」は、まずは一文一文の簡条書きでかまいません。自分の感想、意見（＝論点）を簡条書きにできるようにしましょう。「簡条書きをやってはいけない」という先生も中にはおられますが、何を書くのかははっきりしなければ文章にすることもできません。まずは一文ずつ、感想を書けるようにしましょう。それぞれの文をつなげて文章にする練習は、その後の課題です。

それでは、どんなことを「感想」として書きたいのか学んでいきましょう。

コラム：学問を伝える言葉（2）

「精密コード」というのは、抽象的・普遍的な内容を話すための言葉で、特定の個人や場面に関係なく正確に意味を伝えられますが、その分「精密」に作られているので知識・訓練・緊張が必要です。子供は最初に「制限コード」によって言葉を覚えます。学校での勉強は、より高度な知識を理解し、言い表せるようになるために、「精密コード」をひたすら訓練しているのだ、と言っても過言ではありません。学問・科学を理解し、伝える言葉とは、数式や専門用語などを含めてこの「精密コード」が高度に発達したものです。

「感想」とは自分との「関連付け」

「感想を言え」とは、「与えられた題材と自分がどう関わるか具体的に宣言しなさい」ということです。自分と相手とを積極的に関連付けようとする姿勢を前提にして、次のような点を宣言しましょう。

1. 自分の知識との関連付け

初めて知った知識、考え方など、学んだ点がある。

良く理解できない、もっと詳しく聞きたい、と思った点がある。

2. 自分の考えとの関連付け

自分の考えと一致していて、賛成できる点がある。

自分の考えと一致せず、賛成できない点がある。

まず大切なことは、対象そのものをどうとらえたのかということです。どんなことがわかったのか、わからなかったのか？そしてそれに自分のもつどんな知識が関係してくるのか、どう関係してくるのか、といった関連付けをします。

次に自分の考えとの関連付けです。自分の意見と一致しているのか、していないのか？自分の意見とはどこが、どのように違っているのか、なぜ違っているのか？主体的な意見をもったうえで、対象との関連付けをしましょう。

さて、そうすると感想を書くためには、対象に関わろうとすること、対象をとらえること、そして主体的な意見をもっていること、が要求されていることになります。つまり感想を書くためには、対象を受容する際にすでに主体的な活動をしていなければいけないのです。講義を受ける、映画を見る…それらは情報が勝手にやってくる受動的な活動ではなく、あくまでも能動的に情報を受け取る活動なのだということを意識してください。

これからの「感想文」

自分と対象との関連付けができるようになったら、それらを言語化して感想文にしましょう。

- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 1. 内容の客観的要約（全体の 1/4～1/3 以内にする） | |
| 2. 学んだ点 | …そこからどんなことが考えられるか？ |
| 3. わからなかった点 | …どうしてわからないのか？
どこまでは理解できたのか？ |
| 4. 賛成した点 | …賛成できる理由は？ |
| 5. 賛成できない点 | …どうして賛成できないのか？ |

今回の講義はこういう内容だった。学んだことは2点ある。ひとつめはこれで、もうひとつはこれだ。この部分はこういうことにもつながると思う。この点はよくわからなかった。こういうことだろうか？この主張には賛成だ。しかしこの部分はおかしいと思う、わたしはこう考える…。

どれかが欠けていてもかまいませんが、この5点が感想文の論点です。各ポイントで理由や具体例をあげて詳しく説明し、文章を膨らませましょう。それぞれの論点は自然につながればそれで良いですが、無理につなげようとする必要はありません。与えられた題材と自分との関連付けを、誰かに紹介できるようにまとめましょう。

この「感想文」の書き方は、対象が論文や本、映画などであっても共通です。自分の学習ノートとして、本や講義の感想を書き留めておくと役に立ちますよ！

「感想文」を書くために…メモを取りましょう！

授業の中で、「ここが論点だな」と思ったキーワードをあげていきましょう。今何について論じているのか？先生の話のここがわからないなあ。話し手の意見は？自分はそれに対してどう思うか？など、とにかく思いついた順番で書きます。自分なりの論点が出尽くしたら、ざっと眺めて、重要だと思う論点にチェックを入れます。選んだ論点について、コメントカードを書きましょう。

もちろんこれは発言を求められた場合も同様です。メモを見ながら発言してOKです。

講義形式の授業だから、課題として出されただけで興味のない本だから…と受け身でやり過ごすのではなく、主体的に参加し、実のある時間にしてください。

なぜコメントカードを書くの？

コメントカードなんて、書かなくてもいいんじゃない？とっていませんか。先にも述べたように、基本的にコメントカードは学生の「感想」、つまり授業に対する理解度や参加状況を教員が把握するためのツールです。白紙で提出するという事は「この授業に参加するつもりはない」と宣言しているようなもの。また、よくある誤解ですが「わからなかったと書くと、自分の評価が下がる」というようなことはありません。自分がどの部分がわからないのか、どうしてわからないのか理解している、そしてそれを伝えることが大切です。わからなかったことを教員に伝えてもらえれば、次回からの授業で教員が対応することができます。

教員にしかメリットがない？そんなことはありません。教員が学生の理解度を把握するというのは、学生の側のメリットですよ！また、感想をまとめることそれ自体が自分の理解度チェックでもあります。自分の学習度を高めるためにも、コメントカードを積極的に利用しましょう。

【コメントカード例】

今日の授業では、ドイツ語形容詞について学びました。ドイツ語の形容詞は、語尾変化があり、副詞としても使えるということがわかりました。語尾変化があるぶん、英語よりも難しいと感じました。形容詞の語尾変化にいくつか種類があることはわかったのですが、使い分けがよくわかりません。いつ強変化で、どういうときに弱変化になるのでしょうか。

今日の授業は、ニーベルンゲンの歌についての講義でした。女性は怒らせると怖いということ、ずるいことをすると後で報いを受けるのだということがわかりました。なぜクリエムヒルトは夫の弱点をハーゲンに簡単に教えてしまったのだろうと不思議に思いました。グンター王のように不正を働くことは良くないことですが、だからといってジークフリートを殺してしまうのはやりすぎだと思います。私だったら訴訟をして慰謝料をもぎりとるくらいにしておいて、さすがに死には追いやらないと思います。

第4章 感想からレポート、論文へ ～論理的な文章を書くために

感想文とレポート・論文の違い

感想文…自分をテーマに関連付けし、意見や主張を書く

レポート…指示されたテーマに沿って調べた情報を報告する

論文…自分で設定したテーマに沿って調べた情報を元に結論を導く

※授業の課題レポートは、「～の感想を書きなさい」という感想文を意味している場合もあります。

テーマをとらえ、わかりやすい文を書くことを意識し、書きたいことのポイントをまとめられるようになったら、さらにレポート・論文を書くことを目標にしましょう。レポートや論文は感想文とは異なる特徴を持っています。レポートや論文は一言でいうと、ある程度の量の論理的な文章です。思いついたことをただ並べるのではなく、選んだテーマ、選んだ理由、テーマについてのデータ、結論といった流れを意識することが大切です。

感想文を書くときに大事なのは、書く対象と自分を関連付けて、自分がどのように感じたか、なぜそのように感じたか、自分の意見と比べるとどうか、ということでした。中心になるのは「自分」で、対象について書くことならば、基本的には感じたままに書いてよいということです。一方で、レポートや論文は、先行研究や実際のデータに基づいて書くことが必要です。論文ではさらにそれらのデータから考察を行い、結論を出すことが求められます。

論理的であるということは、他人を説得したり納得させたりすることができるということです。これには、何についてどのように思っているか自分の立場をはっきり示すことや、データや情報等の確かな証拠を順序立てて示すことが必要になります。自分中心で独りよがりになるのではなく、客観的な見方を示すことが重要です。

レポートと論文の違いは何でしょうか。どちらも感想文とは違い、単に自分の考えや

主張ではなく、調べたデータや情報に基づいて書くことが求められる点は同じです。そしてレポートは report つまり報告です。指示されたテーマに沿って調べた情報を示すことが求められます。一方論文では、自分で指定したテーマに沿って調べた情報を元に分析や考察を行い、最後に論拠に基づいて結論を導き出すことが必要です。

レポート・論文を書くには

まずはレポートを書くときに注意することを見た後、それを発展させて論文を書くときに気を付けることを見ていきます。

レポートは思いついた順番にやたらに書くのではなく、誰が読んでも何について書かれているのかわかるように書かなくてはなりません。

レポートを書き始める前に、目的や狙いを明確にしましょう。また、自分で設定した目的や狙いに対して、自分の態度が一貫するようにしましょう。何が書きたかったのか、調べたものに対して自分が何を言いたかったのかわからなくなってしまうと、まとまりのないレポートになってしまいます。書く前にレポートの構成を作っておきましょう。付録1 (p.34) のメモ例も参照してください。

目的や狙いが明確になったら次の3つのブロックを意識してレポートを書きましょう。

レポートの流れ

1. レポートの目的を示す始まりの部分
2. 先行研究やデータなど証拠を示す展開の部分
3. 結論を示す終わりの部分

さらにこれらのブロックの中でも、文と文のつながりを意識して適切な接続詞でつなぎましょう。前の部分を受けて逆のことを述べる「しかし」や書いてきた内容をまとめる「つまり」などがありますが、使いすぎても読みづらくなってしまうので気を付けましょう。また、ポイントを列挙する「第一に…、第二に…」を使うと、注目すべき点が変わりやすくなります。

また文章を段落で区切らずに長い段落にしてしまうと、書いた人の頭の中で情報が整

理されていないように見えます。一段落に話題は1つが基本です。1つの話題について論じ終えたら段落を区切りましょう。文と文のつながりだけではなく、段落同士のつながりも意識するようにしましょう。

レポートで書くべき内容とその書き方

1. データなどから観察される事実
2. 先行研究など他人の言っている内容とその引用
3. 自分が考察したこと

この3つの書く内容を混同しないように注意しましょう。レポートを書く際には、書いてある内容がどのような情報源を持っているかを示さなくてはなりません。これは、レポートを読んだ人が自分でも情報を確認できることを想定しています。また、レポートを書いた人が情報やデータを故意に捻じ曲げたりして発表することを防ぐ意味もあります。レポートを書く前に、自分が書くべき内容を情報源別に必ず整理し、文章で根拠を示すようにしましょう。

レポートにふさわしい文章の書き方で大事なことは、書く内容を3種類にわけて、それぞれにふさわしい書き方をすることです。1. データなどから観察される事実は、例えば、「表1によれば、〇〇は××である」と断定する書き方をします。2. 先行研究など他人の言っている内容とその引用は、「筆者によれば、××と指摘されている」や「筆者は××の中で△△としている」など、誰がどの文献の中で述べていることかを示しましょう。3. 自分が考察したことは、「〇〇から××と考えられる」など、根拠を示して書くことが重要です。この3種類を明確に分け、それぞれの書き方に注意しましょう。このときどの種類の文章でも、口語的な文末は避けるようにします。例えば1なら、「～らしい」、3なら「～と思う」のような文末は、レポートや論文にはふさわしくありません。

レポートにふさわしい書き方を意識しながら書いていても、普段書いている友達とのメールなどの文章のような口語的でわかりづらい文章をつい書いてしまうことがあります。あるいは、レポートらしい書き方をしようとしても、普段書きなれないせいでどこちない文章を書いてしまうこともあるでしょう。レポートでやってしまいがちな間違いをいくつか見てみましょう。

レポートでやってしまいがちな間違い

1. 主語と文末がねじれている
→主語と述語だけを取り出して、ねじれていないか確認しましょう。
2. 程度を表す形容詞が間違っている
→反対の形容詞を使ってみて正しいかどうか判断してみましょう
3. 口語的な書き方を避ける
→どのような語が適切か迷ったときは、類語辞典を引いてみると参考になります。

例えば先行研究を引用して文章を書く場合に、一文が長くなってしまった結果書き出しを忘れてしまい、主語と述語がねじれてしまうことがあります。「筆者によれば××と指摘している」や「筆者は××と指摘されている」などは主語と述語がねじれてしまっている例です。文を書き終わった後に主語と述語だけを取り出して見て、つながりがおかしくないか確認してみましょう。また、主語と述語がねじれた文を書きがちだと感じる人は、一文の中で主語と述語の位置を近づけると、間違いに気付くやすくなります。

次に、程度を表す形容詞を間違ってしまう場合です。データなどを参考にして何かを論じようとするときに、論じ方やそのとき使う語は様々ありますが、思い浮かべた複数の選択肢が頭の中でごちゃごちゃになってしまうとこのようなことが起こります。例えば、「必要性が多い」では、「多い」を反対の形容詞にして「必要性が少ない」にしてみると、間違いに気付くことができるかもしれません。

最後に、自分が書きたいと思った言葉が口語的でレポートにそぐわないことに気付いたけれど、他にどう書いてよいかわからない場合です。たとえば、「～はすごく多い」と書こうとして、「すごく」を他の言葉に置き換えたいけれど、思いつかないということはありませんか。そのような場合は類語辞典を使うとよいでしょう。レポートを書くのにふさわしい単語を探すことができます。

これまで見てきた例のように、普段書くことのないレポートらしい書き方をしようとすると、混乱しておかしな文章になってしまうことがあります。書いたらそれで終わりにするのではなく、必ず書いた文章を読み直し、校正しましょう。このとき、書いてすぐに文章を直そうとしても、自分では正しく書いたという意識があるので間違いに気付

きにくい場合があります。できれば一晩置いてから読み直すといいでしょう。可能ならば、友達に読んでもらい、間違いを指摘してもらおうのも校正に役立ちます。2章のわかりやすい文を書くために気を付けることも参照してみましょう。

続いて、論文を書くとき注意したらよいことにはどんなことがあるでしょうか。レポートはすでに見たように「報告」ですから、情報を調べまとめれば完成です。このとき、自分の意見は全くないか、控えめにすべきです。一方論文は、先行研究やデータをもとにするところはレポートと同じですが、それに加えてテーマを自分で設定すること、それに沿って先行研究やデータを調べ、自分なりに結論を出すことが必要になります。

論文とレポートの違い

レポートは報告＝与えられたテーマに沿って情報を調べ、まとめる
論文は研究報告＝テーマを自分で設定し、参考文献やデータをもとに
自分なりの結論を出す

※感想文とは異なり、「自分なりの結論」は客観性を持つことが求められる。

このときの「自分なりの結論」は感想文で求められる自分の意見とは異なり、そのデータを見れば誰にとっても明らかであることが必要です。これを科学の再現性と呼びます。論文に求められるのはこのような科学の再現性です。科学的であるとは、簡単に言うと今まで他の人が積み重ねてきた研究に基づいて、新しい題材や見方を示し、結果を論文などで示し後に残すということです。

科学や研究というと、何か新しい発見をしなければならないというイメージがあります。しかしこれは、データの扱い方や見方、研究の方法を、今までの研究を全く参考にせず自分勝手な新しいやり方で試すという意味ではありません。扱うテーマは同じでも、今までの研究から一歩先に進んだアプローチを試してみたり、比較対象を他のものに変えたりすることでオリジナリティを表現しましょう。

引用と参考文献の書き方

レポートや論文では、引用した文献の情報を明示する必要があります。これは、どんな文献をもとに論を立てているのか、どんな資料を参照しているのかを後から確認できるようにするための非常に大切な作業です。ある情報を他の文献で参照したにも関わらずその典拠が参考文献にあげられていないと、その情報を盗用したことになってしまいます。引用と参考文献の提示は、レポートや論文を学術的存在として扱ってもらうための大切な作業です。

ここでは一般的な書き方のひとつを学びますが、この他にもさまざまな形式があります。自分が専攻する分野の論文や、投稿予定の雑誌を参照し、どんな形式が用いられているのか調べてみましょう。雑誌や担当教官から指定がある場合は必ず従ってください。指定がない場合は自分で形式を選択してかまいませんが、ひとつの論文の中では必ずひとつの形式で統一します。

まだレポートや論文を書く予定はないという人も、どれかひとつ書式を選んでおくと今後の作業がしやすくなります。執筆のときだけでなく、その準備段階や日ごろの学習段階でもこれらの書誌情報を控えて整理しておきましょう。

【参考文献リストの作り方】

参考文献リストの作り方には大きく2通りあります。ひとつは、著者の姓および出版年をもとに50音順（外国語文献はアルファベット順）にあげる方法、もうひとつは注番号を付けて、文中で引用した順にあげていく方法です。前者の方法では、複数言語の文献がそれぞれ一定数ある場合、言語ごとに並べます。

ここでは参考文献リストをつくるために必要な書誌情報を覚え、集めた文献を整理できるようにしましょう。

書籍（単行本）の場合

1. 著者名
2. 『書誌名』（英語文献はイタリック）
3. 出版者名
4. 出版年
5. 出版地（外国語文献の場合）

まずは一番簡単な、単行本一冊をまるごと参考文献とする場合の書き方です。日本語の本の名前には、必ず二重カギカッコを使用します。この順で書きならべる方法のほか、出版年を丸カッコでくくって著者のあとに記載する方法などもあります。なお、出版年は西暦を用います。

(例 1) 日本語書籍の場合

瀬川真由美『猫の喚きと白ネズミ』白水社、1996

瀬川真由美 (1996)『猫の喚きと白ネズミ』白水社

(例 2) 英語書籍

Labrune, Laurence *The phonology of Japanese*, Oxford University Press, 2012, Oxford.

論文の場合

1. 著者名
2. 「論文名」 (英語の場合は“ ”)
3. 『書誌名』 (英語の場合はイタリック)
4. 書誌編者、書誌著者名
5. 巻号
6. ページ (複数ページにわたる場合は - でつなぐ)
7. 出版者名
8. 出版年
9. URL (参照日)

多くの論文は雑誌や論文集に収められています。そのため、論文の情報、論文が載っている本の情報の両方が必要になります。書籍の場合と同様に本の名前は二重カギカッコでくりますが、論文タイトルには一重のカギカッコを使用します。書誌編者や巻号など、ない場合は省略します。

ウェブページや辞書などを参考文献として提示する場合も同様です。この9点から適宜必要な情報を選択して明記します。また、ウェブ上で入手した資料の場合には9.URL (参照日) を忘れずに明記しましょう。

(例3) 日本語論文、編者のいる書籍・論文集等に収められている場合
秋永一枝「共通語のアクセント」NHK 放送文化研究所（編）『NHK 日本語発音アクセント辞典』174-221 頁，NHK 出版、1998

(例4) 英語論文、雑誌に収められている場合（雑誌の場合は著編者不要）
Archangeli, Diana “Aspects of underspecification theory,” *Phonology* 5, pp.183-208, 1998.

(例5) ウェブ上の辞書を利用した場合
小学館『日本大百科全書』<http://japanknowledge.com/library/>（参照 2016-01-01）

引用と文中での参考文献の表示

カギカッコ「」 論文タイトル、直接引用に用います。

二重カッコ『』 書誌タイトルに用います。

山田（2000） 2000年に出版された山田の文献を参照していることを示します。

山田（2000:15） 2000年に出版された山田の文献の15ページ目を参照していることを示します。

山田（2000a） 同年に出版された同一著者の複数の文献を参照している場合、abc等の記号を用いて区別します。参考文献リストでも同じ記号を付与します。

文中で参考文献を示す際にもいくつかの決まりごとがあります。参考文献リストの場合と同様、「」と『』では意味が異なる点に注意しましょう。基本的に文中での参考文献の提示は著者の姓と出版年を表記し、巻末または注にあげた参考文献リストの中のどの文献をさしているのか、特定できるようにします。

参考文献を使用すると、引用ができるようになります。引用には、直接引用と間接引用の2種類があります。それぞれの書き方を修得し、使い分けられるようにしましょう。

【直接引用とそのやり方】

直接引用は、参照した文献の文言をそのまま記述することをさします。この引用にはカギカッコでくくる方法、引用部全体をインデントする方法の2通りがありますが、これは引用文の長さに応じて使い分けてください。参考文献の形式とは違い、ひとつの論文中に両方の形式を用いてかまいません。

比較的短い文章を直接引用する場合は、引用文をカギカッコでくくります。一方、ある程度まとまった量の文章、目安としては3行を超える文章を直接引用する際にはインデントする方法が有用です。この場合、前後の自分の文章とは行を改め、引用文の前後に1行空け、左側を2〜3字下げます。カギカッコでくくる形でも、インデントを用いる形でも引用文の前後では、なぜこの文献を引用しているのか、この文献を引用して何を言いたいのか、という流れを意識して文章を構成しましょう。

【間接引用とそのやり方】

間接引用は、参照した文献の内容を要約して紹介する方法です。この場合はどの文献の内容であるか、誰の主張であるかを明確に示したうえで、自分の文章として記述します。カギカッコでくくったり、インデントしてはいけません。

引用のためには、著者の主張を要約あるいは切り取り、自分の主張を構成する要素として組み入れる力が必要とされます。2章で学んだ論点を意識すること、3章で身につけた自分の主張との関連付けを思い出してください。

コラム：科学的とはどういうことか (1)

大学で「学問的・科学的」であるかを評価する基準はおおむね次の諸点です。

1. 研究主体（目的）・研究対象・研究方法が明確であること
2. 広い意味で論理的であること
3. 「事実」に誤りがないこと
4. 先行研究を踏まえていること
5. 独創性があること

(例1) 直接引用、分量の少ない場合

池上(2006)では、語について「それと結びつく〈意味〉が伴わなければ〈語〉とは言えない」(p. 19)と述べられており、…

(例2) 直接引用、分量の多い場合

池上(2006: 19)は語に関して次のように述べている。

〈音〉そのものは直接意味と結びつく単語ではなく、それによって構成される〈語〉と呼ばれる単位になって、初めて〈意味〉が担われることになる。〈音〉によって構成されていて一見その言語での〈語〉のように思えても、それと結びつく〈意味〉が伴わなければ〈語〉とは言えない。

つまり語とは単なる音の組み合わせではなく、…

(例3) 間接引用

池上(2006)は、単純に音を組み合わせれば語になるのではなく、そこに意味が伴って初めて語が誕生するのだと述べている。つまり語は…

コラム：科学的とはどういうことか(2)

また研究成果については「同じ条件で繰り返せば、誰がやっても同じ結果が出る」という「再現性」が科学性の大原則です。「再現性」があるから誰にでも利用できるのです。また「再現性」があるかどうか、誰でも検証できなければなりません。そのために研究成果を生み出したプロセスやデータを公開し、誰でもアクセスできるようにします。こうして本当に社会に有益な科学的知識が生み出されていくのです。

日頃の議論やものの考え方で「科学的」かどうかは、専門家が一致して認めている科学的真理や事実に基づいているか、少なくとも依拠しようと努力しているか、根拠をオープンにしているかということで、「再現性」と前述の2. 3. 4.の諸点に関わります。

【付録2】レトリックとは何か

現代の民主主義の考え方や制度の源流は古代ギリシャにさかのぼります。対等平等な全員参加の直接民主制の下で、暴力にも強制にもよらず、ただ言葉の力を使って議論しながら、真理や正義を探り、一定のルールの下で合意を形成し、政策決定や法律的判断の適不適を決めていく文化が生み出されました。

こういう文化と制度の中では、話し言葉のもつ説得力はとりわけ重要でした。演説が巧みで、人を良く動かしてまとめることができる有能な政治家のことをレートルήτορ rhetor（弁論家、雄弁家）と呼び、こういう有能な「弁論家」を育成するためのレートルική ῥητορική rhetoriké（弁論術、雄弁術、修辞学）という特別な技術理論が、既に紀元前5世紀から発達しました。これがレトリックの始まりです。政治家や法律家だけでなく、歴史叙述や文学さえも早くからレトリックの影響を受け、その影響はますます強まっていき、ついにはほとんど全ての名のある文筆家がこの訓練の虜となりました。

説得のための言葉の技術であるレトリックは、その後長い間ヨーロッパの教育になくしてはならないものとされます。中世に大学が生まれたときに「自由人たるにふさわしい一般教養」としてアルテス・リベラーレス artes liberales と呼ばれる7つの科目が専門的教育の前の基礎課程として設定されました。その7つとは、「文法学」「修辞学」「論理学」の三学と、「算術」「幾何」「天文」「音楽」の四科でした。今日のリベラル・アーツ「一般教養」の始まりです。すべての高等教育の人文科学的基礎として、文法や論理と並んでレトリックが重要な位置を占めていたのです。今日でもヨーロッパの「国語教育」「作文教育」の根幹には、レトリックの伝統が脈々と生きています。レトリックはヨーロッパ文化の知られざる必要な基盤なのです。

論理学とともに、初めて学問的なレトリックをまとめたのはアリストテレスの『弁論術』でした。論理学の方はその後も発展を遂げ、数学的な厳密な方法論を保証してくれます。これが狭義の論理性で、形式論理学にきちんと従った議論をする、ということです。

しかしこの論理学一本槍では、現実社会の説得や合意形成に全く無力であることにアリストテレスは気付いていました。現実的な説得は、論理学とは別の次元の筋道をとります。これが広義の論理性で、常識の範囲で筋の通った議論をする、ということです。

このような説得のための筋の通った論の進め方を、論理的な推論に対して「説得推論、エンテュメーマ ἐνθύμημα enthumema」と呼び、そのために必要な形式「トポス τόπος topos」を詳しく論じました。

『弁論術』の中には 28 種類の説得推論の形式が上げられています。そのうちの多くは今日でも通用するものです。

たとえば「相反するものに基づいてなされる」説得推論があります。「節制あることはよいことである。なぜなら、放埒であることは害をもたらすから」。前の文の内容を「説得」するために、反対物への一般的合意を手掛かりとしています。

「より多い、より少ない」の比較に基づく説得推論もあります。「神々ですら一切を知らないのであれば、まして人間がすべてを知るなど、ほとんど不可能である」という例があがっていますが、ギリシャ神話独特のイメージに基づきますね。

「帰納」に準ずる説得推論もあります。「人々は、他人の馬の世話が悪い人間に自分たちの馬を任せはしないし、また、他人の船を転覆させた人に自分の船を任せることもない。もしそうだとすると、何ごとにつけてもこれは同じであるなら、他人の安全をよく守ることができない人を、自分の身の安全のために用いるべきではない。」

このようなレトリック教程の初等訓練のことを「予備訓練、プロギュムナスマタ *προγυμνάσματα progymnasmata*」と呼びます。古代ギリシャのテオンや、古代ローマのクインティリアヌスなど、多くの古典的著作が残っていて、17 世紀ころまではヨーロッパの初等中等教育で実際に使われていました。今日でも現代的にこのプロギュムナスマタを修正して作文教育を行っている事例がヨーロッパにもアメリカにもたくさんあります。教科書も何種類も出ていますし、ネット上ではその授業のサイトを見ることができます。

このプロギュムナスマタの優れているところは、生徒の能力に依拠せず、12~14 のタイプを習得すれば、誰でも一応の弁論が可能になっていることです。

クインティリアヌスによれば、初等文法の授業を終えた子どもたちは、次のような段階を踏んでレトリックを学ぶのでした。

子供たちはイソップ寓話を単純な言葉で語り直すように言われ、それから作文にまとめさせられ、韻文を散文に変える練習をし、同じ内容を違う言葉で表す練習をし、さらに全体を縮めたり、文の飾りを増やしたり、自由に書き換える訓練をしますが、その全てを、元々の意味を損ねないように行います。

これに引き続いて、たいていは読本の教材から取られた、クレイアという逸話・格言の練習を、根拠を添えたり文法的に変化をつけたりして行います。

教育方法について報告がありますが (I,2; 23f)、教師は生徒をクラスに分け、さらに成績順に座らせたそうです。毎月試験があり、結果によって新たな席順が指示されると

いう仕組みです。こうやって生徒同士を競わせた方が、教師の警告や親の期待より効果が上がったものだというのですが、今の日本の話を聞いているようです。

次に文学的な創作の代わりに、歴史的な、真実に基づいた物語が前面に出てきます。

「要約」の訓練では無味乾燥になってはならないが、かといって文学的自由さを下手に真似て、脱線したりわざとらしい描写をしたりしてもならないとされます。

これに続いて、何か疑わしいことを否定したり、強く肯定したりする訓練が来ます。ある報告の確からしさに賛否を述べる訓練です。たとえば、伝説ではウァレリウスがガリア人と一騎打ちをしたときに、ウァレリウスの頭にカラスが舞い降り、嘴と翼で敵を打ち砕いてくれたというのが、信じられるか、というような議論をするわけです。それだけでなく、疑わしい個々のポイント（場所、時、人物）についても考察の対象となりました。

著名な人物を賞賛したり、悪しき人物を非難したりする訓練は、上級の段階を意味しました。賞賛や非難によって、精神や心情にとって有用なものが豊かに得られると期待されたからです。

自然の流れでその次には二人の人物を比較する訓練が来ます。単に美德と欠点を扱うのではなく、それらの関係が確定されなければなりません。

それから共通論題の訓練が来ます。悪徳に染まった人物（たとえば博打打ち）を非難するとか、特定の事項（たとえば愛）や人物（たとえば食事へ招待した客）を賞賛するとか、一般的に通用するテーマを議論します。ときどきもっと魅力的な出題の形を取ります。たとえば「貧しい博打打ち」を非難する、といったような、すぐに「悪い」とは言い切れないようなテーマです。

テーゼ（一般論題）という訓練も、一般的な論点で議論を行います。たとえば次のような問題への答えを論述するのです。官職を求めるべきか、とか、証人は常に信じうるか、とか。比較の観点が入ると、もっと実りの多い課題になります。田園生活と都市生活のいずれが優れているか、とか、法律に明るい人間と戦に長けた人物と、どちらが大きな賞賛に値するか（キケロ『ムーレーナ弁護』）、とか。特に刺激的であったとして、クインティリアヌスは彼の師が出した次のような課題を褒め称えています。なぜウェヌス（ビーナス）はラケダイモン（スパルタ）人の国では武装した姿なのか、とか、なぜクピドー（キューピッド）は少年の姿で、翼を持ち、弓矢をもった姿で描かれるのか、とかいったテーマを与えられたそうです。

そして最後に最高級の課題として、法律そのものの弁護と非難の訓練が来ます。攻撃も、同様に弁護も、特殊な状況を想定しないで、ただ関係する法律の文言と内容に基づいてのみ行われるのです。

a) その法律の文言は十分に明確か、それともどこかに曖昧なところがあるか。

b) その法は首尾一貫しているか、それとも内部矛盾があるか。

さらに、それは過去に関連付けるべき法か、それとも個々の人物に関連付けるべき法か。何より肝心なのは、名誉ある法か、有益な法か。その法は賞賛に値するのか、それとも非難に値するのか。それもより大きな賞賛や非難に、あるいはより小さなそれに値するのか。場合によっては法律全体を誉めたり非難したりし、あるいは法律の一部だけを誉めたり非難したりすることになります。

このような予備訓練において、生徒たちは将来必要になったときにすぐ応用できるような「武器を鍛える」(II,1; 12) のです。裁判を行う者としても行政者としても立法者としても有能な指導的市民になるための訓練でありました。

漢文や日本古典にも見事な「レトリック＝修辞学」が存在しますが、やはり皇帝の宮殿のためのものでした。近代でも通用する民主主義と結びついたレトリックは古代ギリシャにおいて発達しました。

大学生や社会人に必要なライティングやプレゼンテーションについて、このような古典的レトリック教程であるプロギュムナスマタのように、自立した市民を育てるという目標を持った、しっかりした教育プランを作り上げることが、本研究会の目的であり、本書はそのささやかな始まりなのであります。

参考文献

- 阿部謹也『「教養」とは何か』講談社現代新書 1358、1997年
- アリストテレス（戸塚七郎訳）『弁論術』岩波文庫（青 604-8）、1992年
- 家入葉子『文科系ストレイシープのための研究生生活ガイド』ひつじ書房、2005年
- 池上嘉彦『英語の感覚・日本語の感覚』NHK ブックス 1066、NHK 出版、2006年
- 井上尚美『レトリックを作文指導に活かす』明示図書（国語教育ブックレット 11）、1993年
- 入部明子『パワー・ライティング入門 説得力のある文章を書く技術』大修館書店、2013年
- 小笠原喜康『大学生のためのレポート・論文術』講談社現代新書 1603、2002年
- キケロー（大西英文訳）『弁論家について』上下、岩波文庫（青 611-4/5）、2005年
- 菊池誠 他（編）『もうダメされないための「科学」講義』光文社新書 541、2011年
- 木下是雄『レポートの組み立て方』ちくま学芸文庫キ 1-1、1994年
- クインティリアヌス（森谷宇一他訳）『弁論家の教育』（全3巻 西洋古典叢書）京都大学学術出版会、2005～2013年
- 香西秀信・中嶋香緒里『レトリック式作文練習法—古代ローマの少年はどのようにして文章の書き方を学んだか—』明示図書（21世紀型授業づくり 96）、2004年
- 高等教育研究会編『大学を学ぶ 知への招待』青木書店、1996年
- 佐藤学『「学び」から逃走する子どもたち』岩波ブックレット 524、2000年
- 佐藤学『学力を問い直す』岩波ブックレット 548、2001年
- 澤田昭夫『論文の書き方』講談社学術文庫 153、1977年
- 三森ゆりか『外国語を身につけるための日本語レッスン』白水社、2003年
- 三森ゆりか『外国語で発想するための日本語レッスン』白水社、2006年
- 隅谷三喜男『大学でなにを学ぶか』岩波ジュニア新書 38、1981年
- 長尾達也『小論文を学ぶ 知の構築のために』山川出版社、2001年
- 廣川洋一『イソクラテスの修辞学校 西洋的教養の源泉』講談社学術文庫 1718、2005年
- 森靖男『大学生の学習テクニック 第3版』大月書店、2014年
- 山下直『大学初年次における『書くこと』の指導』、『日本語学』第34巻13号、2-13頁、2015年11月
- ラウスベルク、ハインリヒ（Lausberg, Heinrich）（萬澤正美訳）『文学修辞学 文学作品のレトリック分析』東京都立大学出版会、2001年

Penndorf, Julius: *Progymnasmata*. 1911 Plauen i.V. (Neudruck 2015)

Kennedy, George A.: *Progymnasmata*. Scholars Press. Atlanta 2003.

2016年3月20日

千葉大学大学院人文社会科学研究所 教育・学修支援研究会 編・発行

監修 石井正人

表紙デザイン 須藤由佳

レイアウト 深井里奈子

<ディスカッション・執筆メンバー>

姉川雄大 千葉大学アカデミック・リンク・センター 特任助教

石井正人 千葉大学文学部 教授 (前書き、第1章、付録)

伊丹謙太郎 千葉大学医学部 特任助教

大塚萌 千葉大学大学院人文社会科学研究所博士後期課程在学 (第4章)

海田皓介 千葉大学大学院人文社会科学研究所 特別研究員 (第2章)

須藤由佳 千葉大学大学院人文社会科学研究所博士前期課程在学 (第3、4章)

深井里奈子 千葉大学大学院人文社会科学研究所博士前期課程在学 (第2章)
